HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戸田聡著『古代キリスト教研究論集』
Author(s)	辻, 学
Citation	基督教學, 56-57, 50-54
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92836
Type	journal article
File Information	06tsuji.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

戸田　聡著『古代キリスト教研究論集』（北海道大学出版会、二〇二一年）

辻　学

本書は、戸田聡氏（現在、北海道大学大学院文学研究院教授）が２００６年以降に発表してきた論考・書評（第1部第2章のみ例外）をまとめた1冊である。著者の専門は、古代キリスト教史および東方キリスト教文学ということだが、その関心は、聖書学から、近代のキリスト教にまで広がっている。

本書は、主として聖書学関係の論考を集めた第1部と、古代キリスト教を主題とする第2部に分かれている。配列は主に年代順だが、第1部第1章「共観福音書問題のための覚書」だけは、例外としてあえて本書冒頭に置かれている。これは著者が、とくに「この第1部第1章の内容にこだわる」（あとがき）からだという。その内容とは、新約聖書学者の大半が認めている「マルコ優先説」に反対し、「マタイ優先説」（著者の言い方では「マタイ伝最古説」）を主張するものである。

著者の論点は次のようにまとめられる。

(1)ルカ1・1は、ルカ以前に複数の物語が存在したことを示している。しかしQは「物語」とは称されえない。したがってマタイがその「物語」に含まれる可能性は認められるべき。

(2)パウロは、イエスに関する知識を明らかに有していた（ローマ14・14、Ⅰコリント7・10、9・14、11・23―25、さらにローマ1・3）。しかしパウロはその典拠を示していない。仮にパウロがこれらのイエス伝承を口伝で知っていたのであれば、自分の言葉の正当化のために、その由来を示したはずだが、その気配はない。とすれば、何らかの文書に拠っていると考えられる。もしそうであれば、その文書とは前述の5箇所すべてをカバーしている（そして、ダビデの末裔としてのイエスという像を示している）マタイであろう。

(3)受難物語におけるペリコーペ配列順は、マタイとマルコで完全に一致している。したがって「マタイ伝とマルコ伝は、第3の福音書すなわちルカ伝を度外視して、直接に比較されてよく、その直接比較の結果、両者の先後が論じられてよい」(19頁)。

(4)もしB. H. Streeterが言うように、Qは紀元50年代にアンティオキアで成立し、マルコが紀元66年にローマで成立したのであれば、マルコはQを参照できたはずで、そうしなかったのには何か意図があると言わねばならないことになる。

(5)マタイ14・1―13//マルコ6・14―33およびマタイ26・26―28//マルコ14・22―24を検討すれば、先に書かれたのがマタイで、マルコはマタイを書き改めたことがわかる。

周知のように、いわゆる「二資料説」は、マルコが最初に書かれた福音書で(=マルコ優先説)、マタイとルカはそれぞれマルコとQ(=語録資料)に基づいてマルコのいわば「増補改訂版」を作成したが、相互の間に依存関係はないというものである。つまり、マルコ優先説は二資料説の前提ではあるが、Qの存在を必ずしも必要とするものではない。実際、「Qなしのマルコ優先説」が古くから存在しており(いわゆるファラー仮説)、1990年代以降とくにMichael GoulderとMark Goodacreの支持によって勢いを増してきた(それゆえFarrer-Goulder-Goodacre Hypothesisとも呼ばれる)。これは、マルコ優先説に立ち、マタイはマルコを利用しているが、ルカはマルコとマタイの両方を参照しているとする立場である。

したがって、Qの存在を想定するかどうかは、マルコ優先説の可否には直接影響しない。逆に、マルコ優先説が崩れれば、Qの存在も想定しなくてよくなる。それゆえ、上記(1)(4)の議論は、マタイ優先説を唱えるための論拠としては不要であろう。

(2)については、口伝で知っていたなら由来を示したはずというのは著者の想像以上のものではないし、マタイを知っていたと考えるのなら、モチーフが共通するというだけでは不十分で、文言上の一致の有無などについてより立ち入った議論が必要ではないだろうか。(3)は

その通りだと思うが、これは受難物語だけでなく、福音書全体を通して検討すべき問題である。

マタイとマルコの依存関係に直接影響するのは、したがって上記(5)の議論（そして著者が前置きとして挙げているマタイ9・18∥マルコ5・23）ということになる。マタイでは、「ある指導者」が、死んだ娘の蘇生をイエスに願う。それに対してマルコでは、娘はまだ死んでいない。「わたしの幼い娘が死にそうです」（新共同訳）。著者が言うには、マタイ版においてこの指導者が「かくも容易に死者の復活を信じるなどということが、なぜ可能なのか。私見によれば、この表現は全く荒唐無稽だと言わざるをえず、少なくとも、これに比べれば、このペリコーペに対するマルコ伝の並行箇所……の表現の方が遥かに現実味に富む」（22頁）。それゆえこの場合、「非現実的なマタイ伝の物語を、マルコ伝がより現実味のある物語へと改めた」（同）とするのが最良の説明だというのである。

だが著者の解釈は、そもそも物語と現実を混同しているし、この指導者が「かくも容易に」信じたというのも、著者の極めて主観的な判断にすぎない（自分の娘を救いたい気持ちで最後の望みをイエスに託したとも想像できよう）。マタイ11・5のイエスの宣言（「死者は生き返る」）を踏まえて、マタイがイエスの奇跡行為をより強く印象づけるために書き換えたと考えることは十分可能だし、その方が蓋然性は高い。また、マルコでは、最初はまだ死んでいなかった娘が、長血を患う女性の出来事（5・25―34）の間に死んでしまったという設定になっているのに対し、マタイでは、娘は最初から亡くなっており、長血の女性の出来事も極めて簡潔に描かれている（9・20―22）。マルコが、マタイの話を書き換えるために、娘が最初は死んでいなかったことにして、長血の女性の話を拡大し、途中で時間がかかったために娘が死んでしまったというような設定にわざわざ書き換える理由はどこにあるのだろうか。マタイでは「ある指導者」でしかなかった登場人物に「会堂長の一人でヤイロという名の者」と具体性を与える必然性も見いだせないが、逆方向の改変なら、マタイがこの人物の説明を簡略化した

ということで十分納得できよう。

マタイ14・1―13∥マルコ6・14―33の場合、マタイで時間軸が混線しているのは確かである（ヨハネ斬首は過去の話だが、それを聞いたイエスがいま避難しようとしている）。戸田氏は、「知的な著者」であるマタイがそのような混線を書けたとは考えられないが、マルコがその混線を整理するため、ヨハネ斬首（過去）とイエス一行の休憩（現在）を区別する形に書き改めたと主張する。

しかしそのために、イエスが人里離れた場所へ船で移動したのは、危険回避でなく宣教活動後の単なる休憩のためで、イエスだけでなく弟子も一緒だったことにわざわざ書き改める必要があっただろうか。「イエスは舟に乗ってひとり人里離れた所へ退いた」とすれば十分に事足りたはずである。逆に、マタイがマルコを改変したのであれば、ヨハネ斬首とイエスの移動との間に因果関係をつけるために「イエスはこれを聞いて」と書き足したのだが、その結果時間軸がおかしなことになった（しかも舟に乗ったのはイエス一人のはずなのに、15節では弟子たちが一緒にいるという齟齬も生じさせてしまった）と考えれば納得できる。マタイが「知的」だから矛盾を生じさせるような記事を書くはずがないというのは、福音書全体にわたって検討を加えた上で言うのでなければ、著者の思い込み以上のものではない（しかも著者はマタイを「イカれた著者」とも呼んでいる！）。

マタイ26・26―28∥マルコ14・22―24について著者は、弟子たちが飲んだぶどう酒が「イエスの血」だと宣言されるのが、飲む前（マタイ）か飲んだ後（マルコ）かということに大きな違いを見て取り、後者は前者のグロテスクさ（ユダヤ人が血を飲むことはあり得ない）を和らげるための配慮だと言う。しかしこれは読み込みが過ぎるし、宣言が比喩として言われていることを十分考慮していないように思う。

以上の通り、マタイ優先説を唱える著者の主張には説得性がほとんど感じられない。そもそも、共観福音書問題には長い議論の歴史があり、論点も多岐にわたる。この問題だけで分厚い研究書が書かれるほどである。著者がマタイ優先説に固執するのであれば、より広範かつ詳細な議論が必要になろう。

第1部第1章の論評だけでもはや紙数が尽きたが、著者が一番こだわった章でもあり、聖書学を専門とする評者の応答責任もここにあると考えた次第である。本書の残りの部分、とくに『エウセビオスのカノン』を扱う第5章やトマス福音書の翻訳（第6章）からは多くの事柄を教えられるし、古代キリスト教を扱う第2部も非常に示唆に富む。

書　評

J・J・コリンズ著、山吉智久訳『「死海文書」物語―どのように発見され、読まれてきたか』（教文館、二〇二〇年）

山我　哲雄

1946年後半か1947年の初頭に死海のほとりのクムランの洞窟で偶然発見された死海文書は、それまで知られていなかった紀元前後のユダヤ教の多様なあり方に光を当て、またキリスト教の成立の謎を解くうえでも鍵になるものとして、世界中の注目を集めた。それだけではない。それが世の終わりの近接を前提とした強烈な終末論を含むものであったために、ジャーナリズム等に興味本位で取り上げられ、最初の段階で復元、解読の作業に当たったスタッフにカトリックの司祭が多かったこともあり、カトリックにとって不都合な事柄が多数書か